

# J A B E E

## 通信

日本技術者教育認定機構

(第83回)

日本女子大学家政学部住居学科

J A B E E 認定までの歩み (3)

日本女子大学家政学部住居学科 教授 J A B E E 対応責任者

石川 孝重

### 三. 試行審査から本審査へ

試行審査を受けることを決めてからの学科の動きは、素早かった。卒業生や学生の就職先企業など、外部からのニーズを把握するための教育プログラム点検会議を組織し開催しながら、卒業生や就職実績のある企業への大々的なアンケートも実施した。教員相互の教育改善システムの一環として、各教員の担当科目について全教員の前で模擬授業をし、意見交換をもつ研究授業も行った。また、学生への情報開示の一端として、個別科目とカリキュラム全体に関する学生アンケートへの学科からの回答、オフィスアワーの実施と開示など、いくつかの新しい試みがシステム化され、本格的に稼働した。

このようにして始まった、本学科のJ A B E E 認定に対する取り組みであるが、本審査を受けるまでに開催した教育改善会議の回数はこの時まででW G も含めて延べ六十五回、一回で五時間以上の議論になることも多く、会議に要した時間だけでも、相当な長さである。その結果二〇〇二年七月に、二冊にわた

る自己点検書を作成し、同年十二月には実地審査(試行)を受審した。エビデンスの保管には、各校とも頭を悩ませているが、本学科でも、設計や実習関係の図面、作品、模型などを含めると、会議室一室では並べきれないほどの量になった。その整理・閲覧のためのノウハウは、この試行審査のときに培われた。その他、審査員へのプレゼンテーションや質疑応答の進め方、施設検分の道順、学生・教員インタビューの対応、果ては、審査員の食事や茶菓等のメニューや提供方法など、事前に何度も打ち合わせを繰り返した。

本学は私立大学として、創立者の思想のもとに共通のカリキュラムが組まれるなど、大学全体にその伝統の精神が脈々と流れている大学である。試行審査の際に審査員として来学された多くは国立大学の、しかも、工学部の教員である。そういった土壌の違いを、本学の特徴、住居学科の特徴として、いかに理解してもらうかに心を砕いた。最終的には、工学基礎的な理数系科目の充実と教育貢献評価のシステム作りなどについては指摘を受けたものの、概ね、予想以上の高い評価を得た。

この試行審査で得られたことの一つに、J A B E E 認定を受ける際の根拠資料の整備方法がある。アメリカ生まれのこの制度の考え方は、すべて根拠をdocumentationとして示すことが求められる。学科内で慣例的に決まっていた学士・編入学生の単位認定基準の明文化など、これまでのシステムを客観的に眺める良い機会になった。学生や外部への情報開示が求められる現代には、J A B E E 認定とかかわりなく必要なことである。

このような試行審査での経験をもとに、学科内では、いつ本審査を受けるか、という最終決断を迫られることとなった。試行審査までの過程で、すでに各教員の負担はこれまでの比でなく激増しており、既に限界に達しつつある教員が少なくなかった。その上、住居学科におけるJ A B E E 認定の必要性に関しては、この時点でも疑問を投げかける声があった。が、ここまできたら一気呵成に最後までいこう、ここでやめたら学生への申し訳けが立たない、などの気運が大勢を占め、決死の覚悟で二〇〇三年建築J A B E E の初年度に本審査を申請することになった。